

観光資源としての宿場の再発見

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-02-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 恵梨子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/9324

観光資源としての宿場の再発見

林恵梨子

- 1 はじめに
- 2 観光地になる前の由比の姿
 - 2.1 由比宿・間の宿倉沢の歴史
 - 2.2 明治期以降の宿場
- 3 宿場町の観光資源化
 - 3.1 日本全国の歴史的町並み保存
 - 3.2 観光資源化へのきっかけ
 - 3.3 由比本陣公園の整備
 - 3.4 宿場と観光
 - 3.5 住民の声
 - 3.6 由比と全国の歴史的町並み保存の比較
- 4 考察：見えてきた課題
- 5 おわりに

1 はじめに

今回の調査地が由比に決まったとき、調査のテーマを何にするか決めるため、調べていくと、由比は宿場町であったことがわかった。由比宿と由比の最西端に位置する倉沢の間の宿（あいのしゅく）があり、現在は観光資源として利用されていることがわかった。由比宿は、鎌倉時代から宿として機能し、江戸時代まで東海道五十三次の16番目の宿であり、宿場町としてにぎわった歴史を持つ町である。調べていくと由比には、倉沢をはじめとして古い町並みや建物が残り、由比宿の入り口には升形の道が残っているなど、当時の雰囲気を感じられるものが所々に残されている。そして、宿場町であったということを、由比の人々は観光資源として活用しており、宿場という歴史は、現在、由比の観光を支える一つとなっている。そこで、本稿では由比ではどのようにして宿場が観光資源として活用されるようになってきたのか、どのようなことがきっかけで観光資源化が始まったのか、そして、そこに見られる問題点とは何なのかについて明らかにする。

本稿は、由比の宿場町を考察する際、森山の文化資源概念に依拠した上で観光資源という概念を用いる。森山は、「それが何かに用いられ、何かの機能を果たすことでそれを＜資源＞というのなら、およそ人間の活動が何らかの意味での＜文化＞の営みであるかぎりにお

いて、そのほとんどは＜文化資源＞を活用する営みであることになる」（森山 2007：57）と述べている。ということは、観光のために特定の文化資源を用いるということはそれを観光資源化するということになるだろう。宿場町を観光資源化することで、由比の人々は観光客を呼び込もうとしたのであった。

本稿の構成は以下のとおりである。第2節では、由比宿と間の宿である倉沢区の歴史と変遷について述べる。第3節では、宿場の観光資源化のきっかけと、その経緯、観光施設や、活動について述べる。第4節では、宿場を観光資源として活用するにあたっての課題とは何かを考察する。



写真1 倉沢区の町並み（林撮影）



写真2 升型の道（林撮影）

2 観光地になる前の由比の姿

2.1 由比宿・間の宿倉沢の歴史

ここでは平野氏が所持する古文書を静岡大学人文学部社会学科日本史学研究室が解読した『東海道由比宿と神沢村』（2003）と、由比町史（由比町史編さん委員会編 1989）をもとに由比宿の歴史についてまとめていきたい。江戸時代、由比宿は東海道五十三次の16番

目の宿であった。東西約 600 メートル、1843（天保 14）年では、人口 707 人、戸数 160 と比較的小規模な宿であった。戸数 160 のうち、本陣 1 軒、脇本陣 1 軒、旅籠屋 32 軒と比較的旅籠が多い宿場であった。由比宿の歴史をたどれば、由比は鎌倉時代から「湯居宿」とされ、宿として機能してきた。1601（慶長 6）年、徳川家康が伝馬役を出すべき宿駅を指定し、由比宿もこのとき、伝馬宿として指定を受けた。1635（寛永 12）年、徳川家光により参勤交代の制が定められると、交通が頻繁になり、東海道の整備が急速に進められた。そのうちのひとつとして東海道の宿駅の伝馬数が改められた。由比宿では 36 疋・36 人の伝馬駅が課せられていたが、64 疋・64 人の伝馬役が新たに追加され、合計 100 疋・100 人の伝馬役を負担することになった。しかし、由比宿は小さい宿であったため、由比宿だけではその負担ができなかった。そこで、由比宿の西隣に位置し東から順に北田・町屋原・今宿の 3 カ村が、最初に加宿となった。加宿とは、規模が小さいために人馬を出しづらく伝馬役を賄いきれなかった宿に、隣接する村が加わり、人馬の提供を負担した宿のことをいう。それでも、まだ負担しきれず、1694（元禄 7）年には、新たに 8 カ村が加えられ、合計 11 カ村が加宿とされ、由比宿が 5、加宿が 5 の割合で伝馬役を負担した。

表 1 1843（天保 14）年段階の由比・興津・蒲原宿

	総人口	戸数	本陣数	脇本陣数	旅籠屋数
由比宿	707	160	1	1	32
興津宿	1668	316	2	2	34
蒲原宿	2480	509	1	3	42

出典 東海道由比宿と神沢村より林作成

また、『ふるさと由比 歴史散歩編』（由比町文化財保護審議会 1981：36-37）、『東海道を歩く』（本田：2007）によると、由比の倉沢区は、由比宿と由比宿の西隣で現在の静岡市清水区興津にあった興津宿の間にあり、江戸時代、「間の宿」と呼ばれ、多くの旅人が立ち寄ったところであった。「間の宿」とは、大名や旅人が道中休息するため、宿と宿の間に設けられ、茶屋などがあったところをいう。倉沢の間の宿は、由比宿から 1 里、興津へは 1 里 20 町、薩埵峠の登り口に位置しており、本陣、脇本陣をはじめ、5、6 件ほどの休み茶屋があった。薩埵峠は箱根峠、鈴鹿峠とともに東海道の三大難所とされていた峠であり、歌川広重の東海道五十三次、由比の風景にこの薩埵峠からの風景が描かれている。薩埵峠を往来する旅人がここで疲れを癒し、峠下でとれるサザエやアワビを食べたり、休憩をしたりしたそうである。

2.2 明治期以降の宿場

『由比町史』によると、明治時代は、宿場にとって衰退の時代であった。1867（慶応 3）年、大政奉還により、政権が朝廷へ返された。1868（明治元）年、東京へ遷都し、明治天皇

が東京に向かう際、倉沢の柏屋、由比本陣の離れ屋敷でしばし休憩したといわれている。

1871（明治4）年、廃藩置県がおこなわれ、1869（明治2）年頃から、宿駅制の改革が始まり、関所の廃止、本陣、脇本陣も廃止され始めた。そして1872（明治5）年には宿駅制が廃止された。1889（明治22）年、市制・町村制が施行され、由比町が誕生し、東海道線が全線開通した。こうして交通の便が良くなると、宿駅機能は衰退していった。宿駅制が廃止されてから、旅籠や茶屋を営んでいた人々は、農業や漁業などへと生業を変化させていった。以降、徐々に宿場に焦点が当たるようになり、町並みを見に来る人、由比本陣公園を訪れる人が増えてきた（由比町史編さん委員会編 2008）。

3 由比の観光資源化

3.1 日本全国の歴史的町並み保存

日本全国的に、歴史的町並み、建造物などを保存・活用するようになったのは、いつぐらいからなのであろうか。山下晋司によると、高度経済成長期に農村地域から都市部への人口流入が活発になったということがあった。地方都市は過疎化・都市化・高齢化が進み、リゾート開発などに地域振興を委ねざるを得ない状況が生まれ、郷土の風土が損なわれてきた。そのような昔からのものが失われ、開発が活発になっていった社会変化の中、地域に残された資源を掘り起こし地域を活性化する動きが顕著になってきたという（山下 2011）。また、大山琢央によると、高度経済成長期、池田隼人内閣の「全国総合開発計画」により、大規模に国土開発と都市化がおこなわれ、歴史的町並みが失われていった。そのような中で、京都・鎌倉などでの古都保存に始まり、1968（昭和43）年の倉敷市・金沢市の地方都市による町並み保存条例の制定、1974（昭和49）年の「全国町並み保存連盟」の結成、1975（昭和50）年の文化財保護法改正による伝統的建造物群保存地区制度ができるなど、歴史的町並みを保存・活用する動きが現れてきた。歴史的町並み保存は観光・地域振興、まちづくりなどの有効な方法として40年近くに渡り用いられてきたという（大山 2009）。

このように1954（昭和29）～73（昭和48）年くらいまでには、歴史的町並みは失われていき、新たに都市開発がされる動きが大きかったが、都市開発に逆行するような形で町並みを保存し、活用していく動きが1970年代ごろから出てくるようになった。たとえば、白川郷はその好例である。黒田（2013）と麻生・西山（2014）によれば、岐阜県白川村荻町は、1976（昭和51）年に重要伝統的建造物保存地区に選定、1995（平成7）年に世界遺産に登録された合掌造り家屋の集落である。白川村では、住民による建物の保護が先行し、1974（昭和49）年に「白川郷荻町の自然環境を守る会」が結成され、保存の大切さなどを説いてまわった。また、保存計画、基準、ガイドラインを適用し保存されてきた。合掌造りの家屋は現在も利用されており、家屋が過疎で解体される際、多くの建物が、博物館、民家園、レストラン、民宿として移築された。以上の流れの中で、由比はどのように宿場を観光資源として用いてきたのか、次項にて述べていきたい。

3.2 観光資源化へのきっかけ

現在、由比では明治期に入り衰退した宿場が観光資源として活用されている。とはいえ、由比にはそれまで観光の核になる施設がなかったようである。宿場が観光資源として再発見された経緯とはいったいどのようなものであったのだろうか。

由比宿の観光資源化にかかわった人びとの話によると、由比宿を観光資源として活用しようというきっかけは、1989（平成元）年に、本陣跡地を旧由比町が買い取り、由比本陣公園として整備し、歌川広重美術館を設立したことであった。『由比町史補遺』（由比町史編さん委員会編 2008）によると、1560（永禄 3）年に「桶狭間の戦い」で討死した由比助四郎光教の子、権蔵光広が帰農し、この地に永住して以来、由比氏が本陣跡地を所有していた。本陣の館は、1889（明治 22）年から 1890（明治 23）年に取り壊されたが、明治天皇が休憩した離れ屋敷、家康手植えの松は残され保存されていた。しかし、その松も枯死の状態となり、1978（昭和 53）年には、指定されていた県指定天然記念物を解除されてしまう。戦後、東京に由比氏が住むようになってからも由比氏が所有はしていたが空き家の状態であり、住み手もおらず放置された本陣跡地の現状をみて、当時町長であった青木氏たちは、その土地を何かに利用できないか、と考えていた。そこで、1988（昭和 63）年からふるさと創生事業が施行されたことを背景に、旧由比町でもまちづくりをしようという動きがあったこともあり、旧町が 1989 年に本陣跡地を買い取った。また、町制施行百周年を迎えたことも本陣跡地を買い取った理由のひとつである。本陣公園の本格的な整備が始まったのは 1991（平成 3）年であり、それをきっかけにして観光客を呼びこもうとした。

本陣跡地を中心に地域を活性化することを目的として、旧由比町は、その際、残されていた御幸亭（みゆきてい）の建物を復元し、東海道の宿場町という由比の歴史に見合った施設を検討した。青木氏をはじめとする旧由比町の行政の人たちは、美術館なら、展示を変えることができ、大勢のお客さんが飽きずに来てくれると推測し、本陣跡地を拠点に地域が活性化するのはないかと考えた。そこで、当時、教育委員長を務めていた手島氏の縁により、歌川広重の東海道五十三次の浮世絵 55 枚を買い、観光施設として東海道広重美術館が作られた。

3.3 由比本陣公園

由比本陣公園には現在、三つの施設がある。東海道広重美術館と、由比本陣記念館「御幸亭」、東海道由比宿交流館である。東海道広重美術館については第 3 節 2 項で記述したため、ここでは、御幸亭、東海道由比宿交流館について記述する。

『由比町史補遺』によると、御幸亭は、1868 年に明治天皇が江戸へ行く際休憩した由比本陣別館イメージを復元したものであり、1993（平成 5）年に完成した。現在は、「結仁斎」（ゆうじんさい）と命名された茶室があり、広重美術館を見学した人の憩いの場や、茶会として町内外の人に利用されており、迎賓の場としても利用されているという（由比町史編さん委員会編 2008）。

『由比町史補遺』によると、東海道由比宿交流館は、1989年に本陣跡地を購入した際に購入できなかった部分を2002（平成14）年に由比町で追加購入して、つくられた。カルチャー、観光、レストのエリアからなり、観光案内所、喫茶コーナー、展示コーナーがある（由比町史編さん委員会編 2008）。展示コーナーでは、私が今年4月に訪れた際には、由比の伝統的なお祭りであるお太鼓祭りの写真が、今年5月に訪れた際には由比の風景の写真が展示されており、訪れた人に由比のことを知ってもらえるようになっていた。他地域から訪れる人びとは観光案内を聞き、喫茶コーナーや、展示コーナーを利用し、地元の人も喫茶コーナーなどを利用しているようである。また、由比宿の町並みを再現した150分の1サイズの模型が展示コーナーにあり、当時の由比宿や倉沢の間の宿の面影を観光客に想像させる媒介として機能している。



写真3 由比本陣公園（林撮影）

3.4 宿場と観光

由比には、倉沢区・寺尾区などをはじめとして、道沿いに古い建物や、屋並み、道幅が残されており、古い町並みを感じられるところがある。建物には、大垂（おおだれ）、蓐戸（しとみど）が残っている。由比宿の旧入り口には宿場特有の升型の道が残され、旧本陣、旧脇本陣など建物や、一里塚、升形の道などの前には、案内板が設置され、説明が書かれている。本項では宿場を活用して由比の観光にはどのようなものがあるのかを挙げていく。なお、本項の文章は、『静岡文化情報「街かど」第33号』（静岡市文化振興財団編 2009）と、『由比町史補遺』（由比町史編さん委員会編 2008）にもとづいている。

本陣公園をはじめ、宿場に関連した様々な観光施設が整備されていった。では、本陣公園の他にどのような施設が整備されていったのであろうか。

本陣公園がある由比地区では、1997（平成9）年に「由比おもしろ宿場館」がオープンし

た。ここは、入口に『東海道中膝栗毛』に登場する、弥次さん、喜多さんの人形があり、奥に行くと、旅籠、寺子屋などの江戸時代の様子が、望嶽亭藤屋の23代目当主で、画家であった故・松永宝蔵氏がデザインした人形によって再現されており、お土産なども販売されている。2階は、「海の庭」というレストランになっており、サクラエビ料理を食べることができる施設となっている。また、それと同時に、「由比桜えび」として桜えびを商標登録し、東海道広重美術館が開館した1994（平成6）年に、「ゆい桜えび館」が同時にオープンしたということを知った。以上のことから当時、由比宿の観光は、由比地区の特産物とともに発達していったと考えられる。

倉沢・寺尾区には、室町時代末期から、明治時代中期まで続いた宿屋である「望嶽亭藤屋」があり、薩埵峠を訪れる人の休憩所として親しまれていた。また、1998（平成10）年に寺尾地域で名主をしていた小池家の母屋である「小池邸」が国の登録有形文化財に指定された。建物自体は明治時代に建てられたようではあるが、大戸格子や、低い軒の瓦葺が残っており、江戸時代の面影がある。現在は、薩埵峠へのウォーキングや、由比宿を歩く人の休憩場所として利用されている。『由比町史補遺』（由比町史編さん委員会編 2008）と由比の観光ボランティアをしている古牧氏（男性、69歳、町屋原区在住）によると、1990（平成2）年に旧由比町と旧清水市で「薩埵峠整備協議会」が設立され、薩埵峠の歩道や展望台、駐車場などが整備されてきたようである。

宿場に関するイベントはどうであろうか。イベントは、1994年に東海道広重美術館がオープンしたのを機に、商工会が主体となり、美術館とその周りを会場として、1996（平成8）年に「由比本陣祭り」が始まった。その後、「由比宿祭り」、2006（平成18）年に「由比街道まつり」と名称を変え、地元の人だけではなく、観光客も多く訪れている。早駕籠（はやかご）レースや、本陣公園でのステージショーなどが開催され賑わっているようだ。

これらのことから、由比宿を観光資源として活用しようという試みのきっかけは本陣跡地を買い取り、東海道広重美術館を作ったことであつた。また、それに連動して、当時、様々な宿場に関する施設、建物が整備されていったということがわかった。吉岡氏（男性、由比区在住）によると、行政だけではなく、住民の人たちも、本陣公園ができる際、地域の活性化に興味のある人が集まってグループを作り、協力したそうだ。たとえば、地元の人のお話によると、活動としては、生涯学習交流館で「歴史おもしろクラブ」や、「NPO法人ふれあい由比」により、観光ボランティアの方のガイドなどをおこなっている。由比の観光ボランティアは、2006（平成18）年から始まり、当時は、3人で活動していて、現在は4人である。また、歩く人が通るならみかんを出そうと、果物を家の前に出して売ったり、スタンプラリーをしたりしていると聞いて、様々な人が協力して由比の観光資源化を成しとげてきたということがわかった。以上の活動を通して、由比では、地元の人にも、他の地域から来た人にも、由比宿の歴史を知ってもらえるような取り組みがされている。

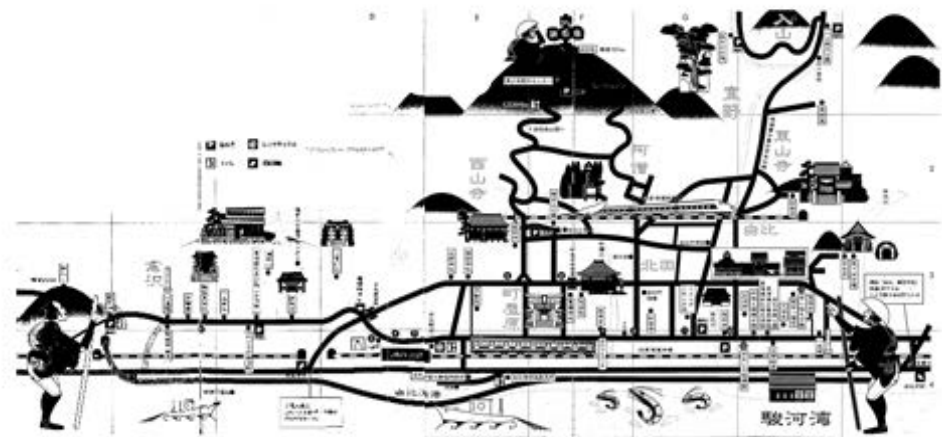


図1『由比を歩こう。』より林改編

3.5 住民の声

宿場が観光資源として活用されるにつれて、住民の中には、宿場への意識が変化した人がいた。たとえば大野氏（男性、61歳、寺尾区在住）は「今まで、普通に生活してきた場所であったから、旧東海道の宿場であるという事実は知っていても意識は特に持っていないかった。しかし、観光客が増えてきてから、意識をするようになってきた」と言っていた。松永氏（男性、60代、倉沢区在住）によると、松永氏が小学生の頃は授業などで由比宿に触れたり、遠足などで行ったりということはなかったそうだが、現在は、小中学校の遠足などで訪れることがあるそうだ。このことから、観光資源として由比宿の町並みが注目を集める中で、地元の人々もその価値や意味を改めて認識するようになってきたことがうかがえる。

その一方で、「町並みはだんだん減ってきており、残ってきた町並みをこれからも残していきたい」という話や、「残ってほしいが、住んでいる人にとっては生活が大変かもしれない。そこに住む住人の生活を第一に考えてほしい」、「古い町並みと、住人の生活、両方をうまく調和できればいいけれど、難しいだろう」という声も多く聞いた。こうした声が明らかにしているのは、古い町並みを残していきたいと思うと同時に、住んでいる住民の生活を優先して考えたいという考えである。元由比町長である望月氏（男性、65歳、阿僧区在住）によると、町並みを保存するための条例があるところもあるが、由比で町並みを保存するための条例は特にない。それは、住民の生活を大切にしたいという思いがあるからだろう。糟谷氏（男性、67歳、寺尾区在住）は、「わずかに残ってきた町並みをどのように継続していくのが課題であり、倉沢区にある望嶽亭藤屋は残していくことに持ち主の理解があり、小池亭は町が買い取ったため残っていくだろう」と言っていた。町並みを残していくには住んでいる住民の理解が必要となり、残していきたい思いと、住んでいる人の生活と

のバランスが難しくなってくるようである。

宿場が観光整備されるにつれて、観光に協力しようとする住民もいるもののその道は平坦ではない。平野氏（男性、71 歳、由比区在住）は、「観光客が来るようになった当時は、外を出るのが大変なくらい人がいた。10 年ぐらい前までは、旧脇本陣である家で観光客が休んでいけるようにしようとしており、庭も 2 年前ぐらいまでは年に 2 回、植木屋さんを呼び手入れをしていたが、現在は観光客も減ってきており、手入れをしても見ていく人がいなくなった。維持していくにも大変なため、やめてしまった」と言っていた。住んでいる住民にも観光のために協力しようとする人がある中で、建物や雰囲気を持していこうとするとそのための資金も住民が負担するという問題があるようである。また、倉沢に住んでいる松永氏（男性、70 代、倉沢区在住）によると、当時は、倉沢に残されている細い道に観光のため人通りや車通りが多くなって、迷惑に感じることもあったそうだ。現在は慣れてきてそういうことはあまり感じなくなったようだが、観光客が増えた当時は大変に思ったこともあるようである。なお、倉沢地区は現在子供が二人だけになっている。子供の生活を第一に考える結果、倉沢区を離れていく人が多くいるようで、その結果、空き家も増えてきている。

また、観光客の増加は、建物や雰囲気の維持のみならず、人々の仕事などにも影響を及ぼしている。吉岡氏（男性、60 代、由比区在住）は、「本陣公園が整備されてからお土産になる手ぬぐいなどを置くようになり、買ってくれる人がでてきてありがたかった。本職は職人として寺社ののぼりや暖簾の染物をしている。観光客が来るようになってからは、作業の途中で対応をしにいくようになった。しかし、優先されるのは本職の方なので、仕事が間に合わない困るため、当時はそれが大変であった」と言っていた。商売をやっている人たちは、観光客が増えてから大変だった面とプラスになった面があるようだ。

話を聞いていく中で、2008（平成 20）年に静岡市と合併してからの観光についての行政側の対応に関する変化も見られた。大野氏によると、交流人口を増加させるための活動は、どこの地域でも力を入れてやっていると思うが、由比宿交流館は NPO 法人ふれあい由比が管理を任されているだけで、町づくりや、イベントは静岡市でやらなければならないため、そこが考えなければいけないところだと語った。吉岡氏は、「由比町だったときにはお寺などに案内板などを立てていつでも見えるようにしていたが、合併してからは、由比だけに予算は回せないということで、案内板への資金は有志が出すようになった」と語っていて、平野氏は、「静岡市と合併してから、行政側の由比宿の観光に関する事業は衰退した。看板が薄くなって読みにくくなっていったり、取れてしまったりしている」と語っていた。また、まちづくりや、イベントなどハードな部分は静岡市が動いてやらなければならないようである。観光に関する行政側の動きは、静岡市と合併し、大都市の中の観光の一つとなった今では、案内板の整備がされないなど、市からのほたらきかけは衰退していつている部分があるようである。

3.6 由比と全国の歴史的町並み保存の比較

本節では、全国の町並み保存の動向と、由比の町並み保存の動向を述べてきた。全国の町並み保存と由比の共通している点は、地域住民が、古い町並みを貴重なもので、残していきたいと考えている人が多くいる点である。白川村では、白川郷荻町の自然環境を守る会が作られ、保護するために活動してきた。由比では、観光ボランティアの方の、町並みを案内する活動をはじめ、由比宿の歴史や、町並みについて紹介する活動がおこなわれている。また、インタビューしていく中で、多くの人が、町並みを貴重なものだ、残したいと考えていると感じた。

とはいえ、住民の想いと観光がうまく両立しているかといえばそうではないということが調査の事例からは読みとれる。由比と全国の町並み保存の違いは、由比には町並みを保存する条例や制度がないことである。条例や制度がないということは、建物を保存していくかは、住んでいる住民に委ねられるということである。実際に住む住民にとっては生活していくうえで不便なことがたくさんあり問題を抱えている方もいる。建物を維持していくための資金も住民が負担する。そのような中で保存していくことは、だんだん難しくなっていく。

4 考察：見えてきた課題

今回の調査の結果、由比宿が由比において観光資源として利用されるようになってきたきっかけは 1989 年に本陣の跡地を旧由比町が買い取り、地域活性化を目指して東海道広重美術館を作り、本陣公園を整備したことに始まるということがわかった。そこから、由比宿は、サクラエビ、果実などの特産品とうまく掛け合って観光資源として利用されてきた。その時、行政だけではなく住民が協力して様々な人が協力して作り上げてきたことがわかった。観光資源として利用された結果、観光客が増えるようになってから、人びとは、生活の場であった建物、町並みが、同時に観光のための資源にもなるということを認識した。その一方で課題もみえてきた。みえてきた課題は、大きく分けて 2 つある。

一つ目は、町並みを残していくことと住民の生活のバランスの難しさである。由比では古い建物などの町並みが徐々に減ってきた。現在残っている町並みを残していきたいという思いを抱いている住民はたくさんいた。しかし、住民が生活していくうえでは道幅が狭いなど困難なことが出てくる。由比の人々に話を聞いてみると、残していきたいという思いと同時に、そこに住んでいる住民の生活を一番大切にしたいという思いの両方を持つ人がたくさんいるということがわかった。由比では白川郷など他の地域で多くみられる町並みや景観を保存するための条例が特別にあるわけではなく、古い町並み、建物を残していくには住んでいる住民の人の理解が必要となってくる。

また、維持費の問題もある。観光に協力しようとしても、現状を維持していくためのお金は住んでいる住民が出さなければならない。大山は、歴史的町並みは他の文化財と異なり、その中での人々の生活が営まれており、地域の人々の努力と修理修景のための規制などの

負担を強いることになる。地域住民の間にも、町並み保存に対する考え方や利害も様々であり、町並み保存・伝統的建造物群保存地区制度の取り組みに際しては地域住民の自主性と合意形成が必要であると述べている（大山 2009）。住民の生活を第一に考えたうえで、特別に保存するための条例がない由比にとって、いつまで町並みを保持できるか保証がない。今後どのように町並み保存を扱っていくのが問題である。また、住民の生活が困難ということに関連して、少子化の傾向もある。現在は、空き家になっている家も多く、子供の生活などを考え、都市部などへ移る人もいるため、子供が少なくなっている。

二つ目は、合併により、観光に対する行政の動きが衰退したことである。静岡市と合併したことで、以前に比べると観光に関する行政側の動きは衰退していった。合併する前は、整備されていた看板などの整備があまりされなくなってしまうという問題がみられた。古い家屋の維持費など、住民の資金だけでは困難になっていくと思われる中、行政とどう関わっていくのが課題となってくる。

以上のことから、宿場にかかわる観光は現在維持するのが難しいことがわかった。森山は、「観光というものを観光する側だけから考えるのではなく、観光客を受け入れる側をも視野に入れるときそしてさらには観光市場を通じて、観光する側とそれを受け入れる側とのあいだに複雑に介在してくる様々なエージェントたち（役所、旅行代理店、運輸業者、ホテル業者、ガイド業者、等々）をも視野に入れるとき、観光は見る側の営為であるだけでなく、見られる側の営為ともなり、かつ、〈見られる〉といういかにも受動的な表現とは裏腹に、〈見られる〉が〈見せる〉という能動的な働きかけへと転化し、そこにおいては逆に、〈見る〉が〈見せられる〉という受動性へと転化するということが理解される」と述べており、「〈見られる〉を〈見せる〉へと転化するとき、そこに自分たちの〈文化〉を「〈資源〉にする」という契機が動的に働き、「〈資源〉である」ものを高次の「〈資源〉にする」というある跳躍が発動される」（森山 2007：65－66）と述べている。これから由比で宿場にかかわる観光を維持していこうと考えるならば、行政と由比がうまくかわり、住んでいる住民が、残していくことに積極的になる環境を設備していくことが必要だといえる。

現在、由比では観光客が減ってきているという。他の地域では、古い建物や、空き家を利用している地域があり、由比も利用している施設はあるが、本陣公園は門だけが再現されていて、門の中の施設は再現されていないことなど、由比宿の中心となっていた本陣公園周辺に雰囲気を感じられる建物が少ないことも課題かもしれない。

条例や行政的な問題を抱える中で、由比に住む人々は、これからまた、どのようにして由比の観光を盛り上げていくかという大きな問いに直面しているといえるだろう。



写真 4 文字が見づらい看板 (林撮影)

5 おわりに

今回は、宿場を観光資源として利用するようになったきっかけと、過程、そこから見えてくる課題を調査した。一時は観光客でにぎわっていた由比だが、現在は減ってきているようであり、古い町並みも少なくなっている。このような古い建物、町並みや、東海道の道幅などは歩いてみて貴重なものだと思感した。また、調査していく中で、由比の人たちは人とのつながりを大切にしているように思えた。古牧氏は、「由比の観光を案内するときは、濃密な付き合いがあるという所を伝えるようにしている。由比には親密な近所づきあいがあるということを観光客の方に知ってもらいたい」と語っていた。ここから、由比の人は人とのつながりを大切にしていることがわかる。私も、実際に歩いているときに果物をいただいたり、突然の押しかけにもかかわらず、快くインタビューに答えていただいたりと、多くの由比の方の温かさに触れることができた。由比の宿場の観光資源化は、行政の働きや特産物とのかかわりとともに、地域住民のそのような意識や、協力とともにあるのだと思う。

謝辞

今回のフィールドワーク調査において、由比の多くの方々に、ご協力いただきました。インタビューに答えていただいたことはもちろん貴重な資料も貸していただきました。皆様の温かさが嬉しかったです。本当にありがとうございました。

参考文献

麻生美希・西山徳明

2014 「白川郷の合掌造り集落における景観保全の新たな手法に関する研究 岐阜県大野郡白川村荻町を対象として」『日本建築学会計画系論文集』79 (700) : 1373-1381。

内堀基光・印東道子・菅原和孝 財団法人放送大学教育振興会。

2007 『資源人類学』

大山琢央

2009 「歴史的町並み保存に関する研究動向」『史学論叢』39：50-64。

黒田乃生

2014 「合掌造り家屋と集落の再生－白川郷と五箇山の事例－」『農村計画学会誌』32(2)：117－120。

財団法人静岡市文化振興財団

2009 『静岡文化情報「街かど」第33号』財団法人静岡市文化振興財団。

静岡大学人文学部社会学科日本史学研究室

2003 『第32回古文書店パンフレット 東海道由比宿と神沢村』静岡大学人文学部社会学科日本史学研究室。

本多隆成

2007 『東海道を歩く』吉川弘文館。

山下晋司

2011 『観光学キーワード』株式会社有斐閣。

由比町史編さん委員会編

1989 『由比町史』静岡県由比町教育委員会。

由比町史編さん委員会編

2008 『由比町史 補遺』静岡県由比町教育委員会。

由比町役場企画観光課

2005 『由比を歩こう。』由比町役場企画観光課。